

リズムから見る民族間の音楽性の違い

～音楽のジャンルは雑種化してしまうのか～

高校1年 C組 39番 名前 宮崎 尊

指導教諭氏名 門倉 慶 先生

目 次

I はじめに

II 「リズム」とは何なのか

III 文化によって表れる「音楽性」の違いの正体とは何か

(1) 文化の特徴から表れるリズム感の違い

(2) リズムが音楽の要素として担う役割の違い

IV 各個人に表れる民族としての音楽性はいつの成長段階に形成されるのか

V 今後の音楽はグローバル化とともに雑種化してしまうのか

リズムから見る民族間の音楽性の違い

～音楽のジャンルは雑種化してしまうのか～

高校1年C組39番 宮崎 尊

I はじめに

日本人はリズム感がないと言われることはしばしばある。だがしかし、これは民族によって得意とする音楽の種類が異なるだけであり、いわゆる“西洋音楽”と呼ばれるロックやポピュラーなどのジャンルの音楽が主流となった現代でこそ起きてしまった錯覚である。そこで本論文は音楽の三大要素¹の中でも最も文化ごとの特色が表れるといわれる「リズム」に着目し、民族、地域ごとにみられる「音楽性」に影響を及ぼしている要因を考察する。なお、すべての民族の音楽性を事細かく一度に見比べることは困難であるため、「日本音楽 vs 西洋音楽」という構図を中心に論じていく。まず、本論文においてリズムを中心に論述をしていくにしたがって「リズムとは何か」という根本的な問いについて考え（第II章）、多民族との文化の違いがどのように音楽に表れるかについてまとめ（第III章）、各個人に表れる民族としての音楽性はいつの成長段階に形成されるかを導き（第IV章）、そして最後に、人々の仕事や生き方までが世界中で均一化（グローバル化）されつつある現代の音楽は今後どのように変化していくのかについて第II～IV章の内容を包括的に捉え考察していく（第V章）。

II 「リズム」とは何なのか

「リズム」という言葉は日常生活では一定の規則や反復という意味で「睡眠のリズムが狂う」という使い方などでよく耳にすることがあるが、この言葉の語源となる音楽用語的な意味は、「音の時間的な変化の構造²」である。しかし、ヒトは聴覚だけに限らず「リズム」を体全体で感ずるため概念を定義することは大変難しく、これこそ文化によっても解釈が異なってきてしまうが、前提として我々が音をリズムとして感ずるためには音が一定の規則性を持ち、定常的ではなく連続的で、時間の経過による速度変化があることが必要だ。（図1³）第I章でも述べたように「リズム」は音楽を特徴づける要素として文化ごとで大きな違いが生まれることは明確で、ある人々の芸術的表現と、彼らの住んでいる土地の自然環境や社会的構造とが深い関係を持つことは、これまでも哲学や人類学の分野で述べられてきた⁴。なかでも、言語や労働、演劇や舞踊が代表的なものである。ヨーロッパのゲルマン系諸語のもつリズム的要素は、ヨーロッパ音楽と深く繋がり

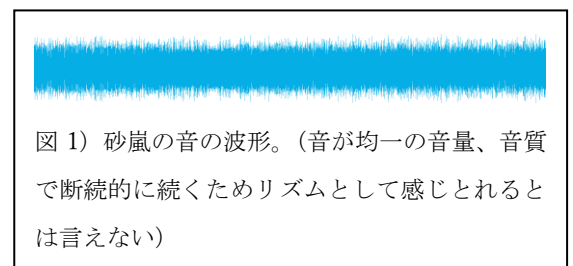


図1) 砂嵐の音の波形。（音が均一の音量、音質で断続的に続くためリズムとして感じとれるとは言えない）

¹ 「リズム」「メロディ」「音色」の三要素のこと。

² デジタル大辞泉（小学館）

³ No.124459 テレビ 砂嵐 ザー ゴー ノイズ (<https://audiostock.jp/audio/124459>) (2020年10月28日取得)

⁴ 小泉文夫『音楽の根源にあるもの』（平凡社 1977年 P.27）

があり、また東南アジアの舞踊の動きはそのまま音楽のリズムに反映しているともいえる⁵。日々の生活の中で人々の間に生まれる音楽はその民族の生活様式や言語に影響されることは極めて自然であり、当たり前でもある。

Ⅲ 文化によって表れる「音楽性」の違いの正体とはなにか

(1) 文化の特徴から表れるリズム感の違い

文化間に生まれる音楽性の違いは民族性や労働の仕方などの違いが大きく反映されているということだが、農耕民族である日本人は、鋤で畑を耕し、漁の網を引っ張りながら「どっこいしょー」

(譜1⁶)や「ヤーレンソーラン」(譜2⁶)などという掛け声をかけていたのが労働歌として発展を遂げて、日本の伝統音楽のほとんどは二拍子的で拍の“表”に手拍子が来る音楽になった。そして、農耕民族は日常的な腰の上下運動が少なく、重心を下半身に置くこと

が、能などの伝統芸能においても腰の位置を低く保つことを基本とさせ、音楽においても日本民謡独自の地に足がついたような穏やかな響きの形成に影響を及ぼしたと考えられる。それに対して、西洋民族を含む騎馬民族の伝統民謡は、馬に乗って移動する際の「パッカパッカ」という三拍子(譜3)あるいは、スウィング⁷のかかった四拍子(譜4)を感じさせられる躍動感や推進力のある円運動を感じさせる舞踊や、音楽(ワルツ)を生んだ。この違いを象徴づける有名な実験がある：

- ① 無作為に選ばれた同じ人数の日本人と西洋人に救急車のサイレンの音を聴いてもらう。
- ② 次に「救急車のサイレンの音はどんな音ですか？」と尋ねると、日本人はほぼ全員が「ピーポーピーポー」と答えるのに対し、西洋人はほとんどが「ポーピーポーピー」と答えるのだと言う。(譜5⁶)

実際に私もドイツに滞在していた頃、小学校の音楽の授業でクラスメイトと様々な生活の音を楽器や身体を使って表現するという内容に取

<p>譜 1)</p>  <p>譜 2)</p>  <p>いずれも音韻(強迫)が小節の頭にきている</p>	<p>譜 3)</p>  <p>譜 4)</p>  <p>いずれも音韻(強迫)が裏拍にきている</p>
---	---

譜 5)



⁵ 注4同書 (P.41)

⁶ 楽譜作成ソフト musescore 3 で作成

⁷ 二つの連続した音符のうちはじめの音を長くし、ふたつ目の音符を短くするリズムの一種。ジャズやブルースなどのブラックミュージックで用いることが多い。

り組んだ時に、周りのドイツ人の子たちが救急車の音を「nee naa nee naa」と表現していたのが印象的だった。更に西洋人の知り合いに①の質問を問いかけても、やはり「ポーピーポーピー」と答えた。これも日本の農耕民謡が「強拍」と「弱拍」の繰り返しからなる2拍子的なリズムで構成されている音楽であることに慣れてしまい、強い音を表拍として聞き取る傾向がいつの間にか身につけてしまったものといえる。

また、西洋のリズム感と日本のリズム感の差を生み出している背景には使っている言語の違いも大きく影響していると言える。例えば「コンピューター」という言葉を例にとってみよう。日本語は一つの文字の単位の発音が「母音+子音」であるため、1つのシラブル⁸が細かくなってしまいがちである。ゆえにシラブル間の音の流れが感じにくくなり、シラブルを音符で表すと小節の1拍目からリズムを刻んでいるように聞こえてしまう。(譜6⁶) それに比べて、ラテン語やゲルマン系言語などから派生して誕生した英語は、1つのシラブルの中に含むことのできる音のバリエーションが豊富であるから、シラブル同での流れが生まれやすく、言葉が弱起⁹で始まることが割合的に多い。(譜7⁶) つまり言語面から見ても、日本人は表拍に強拍を置き、西洋人は裏拍に重きを置いているという。このような理由から、裏拍を強調した音楽(ジャズやロック)に日本人が苦手意識を持ちやすくなるのだと考えられる。

譜6)



コンピューター

譜7)




Com puter

(2) リズムが音楽の要素として担う役割の違い

「始め善ければ、終わり善し」という諺があるように、日本人には途中経過で少し躓いてしまっても終わりさえ良ければ一件落着、というように途中経過より物事の最初と最後を重要視する。古典文学を読んでも、「万のことも、初め終はりこそをかしけれ¹⁰」(現代語訳：この世界のことは、始めと終わりが大切なのだ)などと古くからこの考え方が顕著に日本人の心の中に存在していたことがわかる。この考え方が直接日本人のリズム感にまで影響を及ぼしたとは言い切れないが、日本の音楽は始めの「出発感」と終わりの「段落感」を意識して作られているものがほとんどである。具体的に述べると、日本の民謡はひとつのまとまりをもつフレーズの中で、いきなり第1拍目から音楽の緊張が起り、一番後の音が発音された瞬間にフレーズの解放が起こる。典型的な“わらべうた”のリズムを持つ『ひらいたひらいた』(譜8¹¹)を見てみるとリズムの形が左右対称になっていて一文字目の「ひ」と最後の文字である「た」は他の音符よりも音価¹²が長く、フレーズが最も

譜8)



譜1 <ひらいたひらいた>

⁸ 音節のこと

⁹ 弱起(独：アウフタクト、英：アップビート) 音楽用語でメロディが裏拍から始まること(メロディにスピード感、推進力を与えることができる)

¹⁰ 吉田兼好「徒然草」(第百三十七段)

¹¹ 注4同書 譜1 <ひらいたひらいた> (P.53)

¹² 楽譜上の音符の時間の長さ

発展する中央の二小節はリズムが細かく刻まれている。フレーズをシンメトリーにすることで一番強調したい部分を最初と最後で統一して強調することができ、中央部の細かく刻んだリズムで抑揚や、緩急をつける前提として作られている。これは日本の民謡音楽の最も基本的な一例をとって分析したものだが、西洋の民謡と比べてみるとフレーズ上の“物語”の作り方が大きく異なることが見えてくる。

西洋音楽では、各民族によって民謡音楽のリズム構成はさまざまであるが、近代以後に芸術音楽の主流となったドイツの古典・ロマン派音楽では次第に一定の緊張・弛緩の原理がリズムの中心で支配的になってきた。¹³ドイツ民謡の『戦友』¹⁴を見てみると、楽譜の上付き括弧で句を分けることができ、各句の中心が強拍に来るように構成されている。また、日本民謡にみられたフレーズにおけるシンメトリー構造も見られず、一つの大きいフレーズの中で定められたリズムに忠実に沿いつつ、小さいフレーズをいくつも積み重ねて緊張を生み出し、旋律の上行、下行を巧みに操って、解放を作っている。

このように各民謡ではリズムの構造の違いや、出発感や終止感の解釈の差が各文化の習慣や考え方に左右されていて、メロディの緩急があつての「リズム」なのか、あるいは、ビートやテンポを意識したうえでの「リズム」なのかなど、「リズム」が音楽の中で持つ権力の強さも異なってくるのがわかる。

譜 9)

譜 3 <Der gute Kamerad> ドイツ民謡

IV 各個人に表れる民族としての音楽性は成長段階に形成されるのか

各民族の音楽性は文化ごとの社会的要因に影響されて形成されているということが言えることが分かったが、本章ではその音楽性がどのような背景、段階で各個人に身についていくのかを考察していく。農耕や牧畜が多数の人々にとっての主な日々の営みであった時代では、個人にリズム感が定着したのは労働を始めるイニシエーション¹⁵を終えてからだと考えられる。しかし、近代化が進み一部の発展途上国を除き、世界の人々の日々の仕事が均一化されつつある現代において、なぜ正反対のリズムの取り方（第III章）をしてしまうほど民族によってリズムの取り方が異なってしまうのだろうか。

エルサレム・ヘブライ大学の Rachel Bachner-Melman 氏らによる研究¹⁶によると、遺伝子が音楽的才能に与える影響は他の絵画などの芸術よりも非常に高く、いくつかの遺伝子と音楽的才能との関係も報告されている。すなわち、リズム感などの個人の音楽性は少なからず先天的な要因もある可能性があるということが言える。Bachner-Melman 氏らによれば SLC6A4 という遺伝子は今まではアルコール中毒や強迫性障害などの

¹³ 注 4 同書 (P.57)

¹⁴ 注 4 同書 譜 3 <Der gute Kamerad> (P.57)

¹⁵ 成人を示すもの (=通過儀礼) 例として奈良時代の元服 (11~16 歳) などがあげられる。

¹⁶ Rachel Bachner-Melman, Christian Dina, Ada H. Zohar, Naama Constantini, Elad Lerer, Sarah Hoch, Sarah Sella, Lubov Nemanov, Inga Gritsenko, Pesach Lichtenberg, Roni Granot, Richard P. Ebstein
「AVPR1a and SLC6A4 Gene Polymorphisms Are Associated with Creative Dance Performance」

精神状態に関連していた遺伝子として知られていたが、近年ではリズム感にも関わっていることがわかってきた。他にも個人の音楽性に関連している可能性のある遺伝子が複数見つかった。

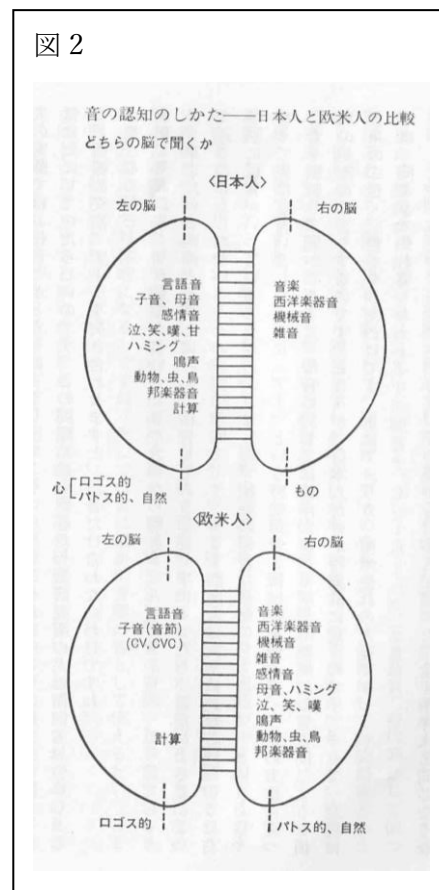
後天的理由としては、使っている言語が異なることが大きく影響していると考えられる。先進国の現代人は学生であれば毎日座学をし、社会人であればデスクワークをする人が多数になった。また、現代の農業や水産業においても機械化が進み、掛け声をしながら身体を同じリズムで刻むことは確実に減ってしまっている。しかし言語に関しては、世界中で統一されてしまったわけではない。更に脳科学的に、しゃべる言語によって相手の声を聞く際に使う脳の部分が違うため音楽を聴きとるときのメロディ、リズム、ハーモニーを処理する能力が民族間で得意不得意が少なからず生まれてしまう。(図 2¹⁷)

このように我々の身体や脳がどのような仕組みで働いているかは未解明な部分もたくさんあるが、各個人の音楽性を形成する要因には、先天的なものも後天的なものもあり、後天的なものとして脳が発達してコミュニケーションをとれるレベルの母国語を話すことができるようになった時期の影響が大きいと考えられる。

V 今後の音楽はグローバル化とともに雑種化してしまうのか

第三章、第四章では文化的に、民族的に生まれた音楽の特徴の違いについて、具体的に焦点を絞って考察をし、音楽の個性の違いには民族の言語や生活様式が密接に関係しているということがわかった。グローバル化が進んだ現代において世界中の人とモノの流通が盛んになっているが、文化がより一層交じりあっていったら、ジャンルや音楽性は統一されていってしまうのだろうか。今後、混血の人が増え言語も混ざり合っていたとき、遺伝的に表れる音楽性の違いはなくなり民族としての“リズム感”は統一され、ジャンルの壁はより一層薄くなっていくと推測できる。しかし同時に、伝統的でローカルな民謡音楽を保存する運動が起きて、より各地域に根付いていこう。過去の例を見てみれば、すでに日本には一度 1980 年代に西洋文化を受け入れ、ポピュラー、ロック、ラップ、メタルなどたくさんのジャンルが国内に入ってきて、受動的な立場ではあったが“グローバル化”を経験している。それでも国内では昭和のムード歌謡やオーケストラを使いつつ、日本特有の五七調のリズムで構成されている演歌など独自の発展を遂げ、日本の音楽は共存することに成功している。若手の演歌歌手が 2020 年になっても登場し続けているのはその証拠ともいえるだろう。つまり、もともとその地域特有の生活様式から生まれたリズムの音楽は他文化の音楽と混ざりあったとしても、その地域で育まれた音楽性は歴史として受け継がれ新しい音楽として生まれ変わり、より栄えた音楽文化が誕生するのではないだろうか。なぜならば、人々は他文化に触れて初めて自分のアイデンティティを強く自覚しそれを表現しようとするからだ。

図 2



¹⁷ 注 4 同書 (P.228)

【参考文献】

- ◆ 小泉文夫『音楽の根源にあるもの』（平凡社 1994年）
- ◆ フィリップ・ボール（夏目大訳）『音楽の化学』（河出書房新社 2011年）
- ◆ 武満徹 川田順造『音・ことば・人間』（岩波書店 1992年）
- ◆ 上畠力・木本治子・小島律子・沢田篤子・松村直行・馬淵卯三郎「児童期におけるリズム感の研究（第1報）」（大阪教育大学音楽教室 1979年受付）
- ◆ Rachel Bachner-Melman , Christian Dina , Ada H. Zohar , Naama Constantini , Elad Lerer , Sarah Hoch , Sarah Sella , Lubov Nemanov , Inga Gritsenko , Pesach Lichtenberg , Roni Granot , Richard P. Ebstein
「AVPR1a and SLC6A4 Gene Polymorphisms Are Associated with Creative Dance Performance」
- ◆ <https://www.sciencedaily.com/releases/2017/03/170309120629.htm> (2020年10月30日取得)
- ◆ 酒井邦嘉 『言葉と音楽の脳科学』 http://mind.c.u-tokyo.ac.jp/Sakai_Lab_files/Staff/KLS_PaperJ/KLS2010JNg.pdf (2020年10月30日取得)
- ◆ 東谷護 「ポピュラー音楽とグローバル化」(2018)